

座布団づくりで初めて知る「綿」の魅力



自在に綿を扱う鮮やかな職人技にドキドキわくわくの参加者

7月29日、人気の連続講座「温故知新『昭和の家事』鑑賞&プチ体験」が開催されました。今回の上映作品は「夏掛ふとんをつくる」。明治生まれのスーパー主婦・小泉スズさんが、着なくなった夏の着物地で、夏用の軽い布団を仕上げる様子が収められています。懐かしい方も初めて見る方にも見どころ満載の内容でした。映画鑑賞のあとは、プチ体験コーナー。今回は「綿」の魅力を伝えよう！ということで、つくば市内の和布工房「はんでんや」の木村寿子さん、土浦市の綿の専門家・斎藤一雄さん（斎藤綿店）をナビゲーターとしてお招きし、お裁縫と綿入れ、両方を同時に体験できる「小座布団」を作りました。この日は夏休みがスタートしたばかりということもあり、親子連れの参加者も多数。慣れない作業に予定時間を大幅にオーバーしてようやく完成した小座布団はどれもステキな仕上がり。みなさんの達成感もひとしおだったようです。

小学生が新聞づくりに挑戦 ～カピオ取材し発信～

つくば市民大学で8月5日、「新聞記者と新聞づくりワークショップ」が開かれ、市内に住む小学3～4年生の親子3組が、つくばカピオを取材し、新聞づくりに挑戦しました。子どもたちに、自分の目で見たり聞いたりしたことを記事にして発信する体験をしてもらおうと、元常陽新聞の大志万容子記者が新聞作りのノウハウを手ほどきしました。子どもたちは「記者」にふんしてカピオを訪れ、職員の案内で、普段は見ることのできない、行き止まりになっている2階部分の奇妙な廊下や、来月には撤去される真空集じんシステムのごみ搬入口などを取材しました。その後、記事づくりに挑戦。実際に見て面白かったことやびっくりしたことを記事にして「カピオドキドキ新聞」や「なつやすみ新聞」、「ワークショップ新聞」を1時間ほどで完成させました。大志万記者は「自分の考えをどんどん発信してください」と子どもたちに呼び掛けました。



←一緒に講師を勤めてくださった元記者・鈴木宏子さんによるレポート。さすがプロ！簡潔に決まったかついい文章ですね。

「トントン効果」でフラットな社会に



思うように動かせなかった指が「トントン」ですと動くように。

9月18日、DET(障害平等研修)の考え方を知り、ワークショップをすることで、インクルーシブな社会への道すじをともに考える講座が開催されました。DETファシリテーター・有賀さんのあたたかいファシリテーションで、グループでの対話も進み、場自体も多様な人がいるというありがたい環境で学ぶことができました。なかでも、ワークの中で体験した「トントン効果」(複雑に組み合わせで動かさずらくなった手指を、そばにいる人がトントンとつついて、スムーズに動かせるようにする)では、各ペアから感嘆の声があがり、大変盛り上がりました。参加者からは「障害のある方、そのご家族、非障害者が共に過ごすことも新鮮でした」「障がいのあるなしにかかわらず、相手を知ること、自分を知ってもらうということが大事だと思った」などの声をいただき、多くの気づきがあったようです。有賀さん、ご参加いただいたみなさん、ありがとうございました。

注目講座

みんなで舞台を楽しもう！



イギリスの劇場では聞こえない方も楽しめるよう手話通訳、字幕投影、また見えない方の音声ガイド、舞台説明会などが劇場で提供されているそうです。

日本も、聞こえない方・見えない方も一緒に舞台芸術を気軽に楽しめる環境になるよう、台本貸出や手話通訳、字幕投影などを担う団体、公演主催者・劇場と、当事者の方とを結びながら実践を拡げるNPO 法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク(TA-net)の廣川麻子さん。

どのような環境があれば一緒に楽しめるのか、どんな実践がされてきているのか、日本ろう者劇団で俳優や制作者として20年以上活動されてきた廣川さんから話題提供していただき、みんなで舞台を一緒に楽しむにはどうしたらいいかをともに考えます。

■話題提供者 廣川麻子さん

シアター・アクセシビリティ・ネットワーク(TA-net)理事長

1994年、日本ろう者劇団入団。

2009年9月～2010年9月、ダスキン障害者リーダー育成海外派遣事業第29期生として英国の劇団 Graeae Theatre Company を拠点に障害者の演劇活動をテーマに研修。

この時に観劇における支援制度に衝撃を受け、日本でもこのような仕組みを創りたいと、仲間たちとともに2012年12月に観劇支援団体「シアター・アクセシビリティ・ネットワーク」を立ち上げる。俳優、制作、ワークショップ、企画運営など演劇を中心とした活動を展開中。

■日時 2017年10月21日(土)13:30～16:30

■参加費 大人 500円

詳細は同封のチラシをご参照ください。

注目講座

〈わたしたち〉として生きるための ダイアログ・バー

市民活動・地域活動・福祉活動など、「他者とともに何かをなす」ことにおいては、(かかわり)に関する悩みや難しさがつきものです。政治理論の知見を援用しながら、「一筋縄ではいかない問い」をめぐる対話をじっくりと楽しむ「ダイアログ・バー」で、〈わたしたち〉として生きるための知恵への手がかりを探してみませんか？

■ナビゲーター 徳田 太郎さん(ユニベルシタスつくば 代表幹事)

■日時・各回のテーマ (全9回 すべて木曜日、夜7時～9時)

第1回 9月28日 「私の勝手」で済む？

第2回 10月12日 なぜ助け合いが必要？

第3回 10月19日 みんなで決めたほうがよい？

第4回 10月26日 多数決で決めればよい？

第5回 11月2日 私は何をどこまでできる？

第6回 11月9日 「私のこと」も政治なの？

第7回 12月7日 異文化体験でわかりあえる？

第8回 12月14日 公共性はどこにある？

第9回 12月21日 「市民である」とはどういうこと？

■参加費 1000円(大学生以下500円)／回

単発参加大歓迎。詳細は同封のチラシをご参照ください。



特別寄稿

マージィ武藤さん



つくば市民大学と私

縁もゆかりもないまちでの新生活に不安な日々の中、近所ですごく関心のあるイベントを見つけた。オープン間もないつくば市民大学の講座だった。「こんなテーマをやる場があるんだ」と色めいたが、シャイすぎて未知の場へ飛び込めない性分の私は、結局その機会は逃した。その後も同じ繰り返し。何年も過ぎ、内心興味があったファンシレーション講座へ偶然友人が誘ってくれ、乗っかって参加したのが昨年4月。その後、自分の活動(社会課題テーマの映画上映とトーク)を開催させていただき、今年1～9月に計8回を実施。これがきっかけで実にさまざまな人とつながり、さらなる新しい機会も広がっている。

いま、市民大学を遠巻きに眺めていた頃の自分を思い浮かべると、私がこの場に強く惹かれたのは、そこに自分に響いて来るテーマがあったからだ。東京や100万都市ならいざ知らず、この小さな地方都市で出会うとは思わなかったテーマが「ウェルカム」と手を広げていた。この小さなまちにも共通の関心を持つ人がいて、関心を持つ人が発信をしている、それができる「場」があることが、当時も今も私に希望を与えてくれる。

一つのテーマをめぐって誰かと思いをシェアするのは嬉しい。切り口は人によって異なり、あっちから見る人も、こっちから見る人もいる。でも、どっちから見てもいい。いろんな視点があるからこそ、人生は、社会は、面白い——。そんな文化が根づいている場だとも感じる。

つくばは人口移動の激しいまち。来る人、行く人。かつての私のように一歩を踏み出せず戸惑いの中にいる人が、常にいる。そんな人にこそ「一緒に行かなあひ？」と誘いたくなる場所。私にとって、それがつくば市民大学であり、このまちから消えないで欲しい文化である。

■マージィ武藤さん

「ないものは、自分でつくる」を原点とした、自主上映会・セミナー・ワークショップ・体験講座などを開催する Shake-Hands.org を主催。市民大学では過去8回対話&上映会を開催。 <http://shake-hands.org/>

代表幹事・徳田の「オススメの一冊」

シェリー・タークル(著)『一緒にいてもスマホ』

(2017年3月・青土社)

「私の家には三脚の椅子があった。ひとつ目は孤独のための、二つ目は友情のための、三つ目は社交のための椅子が。」

本書冒頭に掲げられた、ソローの言葉です。

原題は『会話の再生—デジタル時代におけるトークのパワー』。ただし、単純にデジタル・デバイスを否定するものではありませんし、単純に「一緒にいてもスマホ」を批判するものでもありません。著者は、まず「ひとつ目の椅子」に着目します。「孤独が自己の安定感を強化し、安定感があれば共感能力が生まれる。そして、他者との会話が内省のための素材をもたらす。ひとりのときと同じように、ともに語り合う態勢になって、より豊かな孤独にひたることをともに学ぶのだ」(p.18)。そう、「一人のときのスマホ」も問題含みですし、逆に内省や対話を深めるようにデジタル・ツールを使うことの可能性も追求することができるのではないのでしょうか。

つくば市民大学は、いつでも「三つ目の椅子」を用意しています。残り短い期間ですが、内省と対話のサイクルを回すための「サード・プレイス」として活用いただければ幸いです。(徳田)

スタッフよりヒトコト

マージィ武藤さんに寄稿していただいた文章 この小さな地方都市で出会うとは思わなかったテーマが「ウェルカム」と手を広げていた。この小さなまちにも共通の関心を持つ人がいて、関心を持つ人が発信をしている、それができる「場」があることが、当時も今も私に希望を与えてくれる。という箇所をウルッと来てしまいました。あと数ヶ月、市民大学という場のポテンシャルをどれだけ広げることができるか、私なりに最後まで頑張っていこうと思います。(とこり)

つくば市民大学

〒305-0033 つくば市東新井15-2 ろうきんビル5階

TEL: 029-828-8891 Fax: 029-828-8892

e-mail: info@tsukuba-cu.net Twitter: @tsukuba_cu

web サイト・Facebook: 「つくば市民大学」で検索